

モンゴルの風を日本に 日本の風をモンゴルに ～気づき・考え・行動～

土佐市立波介小学校 担当教科／小学校全科

杉田 亮介

●実践教科:総合・学級活動・道徳 ●時間数:8時間 ●対象学年:小学5年生 ●対象人数:18名

授業実践のねらい

人とのつながりを大切に、「ちがい」を認め合い、「自分のためにだけでなくみんなのためにも」と行動できる児童の育成。

授業実践の構成

時間	テーマ・ねらい	主な学習活動	使用教材等
第1時	世界について知ろう	・自分たちが知っている世界の国々について発表する。 ・世界の国々について ・世界の現状を知る	・世界地図 ・ワークシート
第2・3時	モンゴルってどんな国? 全校に紹介しよう	・フォトランゲージを行う ・モンゴルについて(YES/NOクイズ) ・ちがいのちがい	・写真 ・パワーポイント ・ワークシート
第4・5時	JICA って何だろう?	・JICA の活動について知る ・青年海外協力隊として活躍している人達がいることを知り、その人達の思いや願いを聞く。	・写真 ・パワーポイント ・ワークシート
第6・7・8時	モンゴルの風を日本に 日本の風をモンゴルに ～気づき・考え・行動～	・今まで関わった人たち(青年海外協力隊員、JICA 職員、西村さん、田中さん等)から聞いた話や感じたことをもとに、自分たちができる「助け合い」について考える。 ・考えたことをもとに、どのように行動すれば、みんなに広がっていくか伝え合い、考えを共有する。	・今まで関わった人たちの写真 ・ワークシート

授業の詳細

第1時 世界について知ろう

子どもたちの実態としては、世界の現状に対する知識はあまりない。しかし、外国に対する関心は高く、世界には自分たちばかりのような人ではなく、「貧しい人」もいるということも知っている。また、国語科で学習したユニセフ募金についても自分なりの考えを持つ児童が多い。

そこで、地球上には多種多様な人々が生活しており、人種や言葉、文化が違っていても、お互いに理解しようとする気持ちがあればコミュニケーションを図ることができるということを、「モンゴル」で見えてきたことや体験してきたことを通して伝える。そして、さらに世界の国への関心を持たせたいと考えた。

児童の反応

- 世界って広いなーと思いました。
- 世界の国は50か国位だと思っていたので、予想以上に多く驚きました。
- 学校に行くのが当たり前だと思っていたけど、世界には私たちが当たり前だと思ていない国もあるのだと知り、悲しくなりました。
- 以前国語の勉強で「ユニセフ募金」の学習をしたけど、少しずつ自分ができる募金をしてみたいと思いました。

【所感】

世界には、195か国あるが実際に知っている国は少ない。また、児童が知っているのは主に、先進国が多いのではと考えたが、自分で以前から興味があり調べた児童、TVや地図等から国の名前を知っていた児童等、予想以上に発展途上国の名前も出た。また、以前国語科で学習した「ユニセフ募金」の学習と絡めて発言する児童等もあり、学習に対する関心の高さを伺えた。

第2・3時 モンゴルってどんな国？

教師海外研修に参加することが決まった時、拍手をして一緒に喜んでくれた子どもたち。その時「私たちが書いた手紙等も持って行ってほしい」という声もあり、モンゴルの人たちに自分たちの気持ちを込めた手紙や、自分の好きな言葉を習字にして持っていくことにした。今回の授業では自分がモンゴルで見えてきたこと、感じたことをYES/NOクイズにしたり、フォトランゲージを通して学習を行った。また、全校の児童と一緒にモンゴルクイズを行い、モンゴルについて紹介した。

児童の反応

- モンゴルの人達は自分が飼っている動物をすごく大切にしていると感じました。
- モンゴルの子供も達は、朝から昼までと、昼から夕方までの2回にわかれて勉強していたのでびっくりしました。
- 今まではモンゴルのことはあまり知らなかったけど、今日モンゴルの勉強ができてよかったです。
- 民族衣装や国技がそれぞれ違うのは、あっていい違いだと思いました。それは、国それぞれ大切にしていかなければいけないところだからです。
- 人は国が違って一緒にいると思えました。(中略)その国それぞれ昔からの伝統や言葉等も違うけれど、みんな同じでみんな楽しく生きられるようにしなければいけないし、したいと思いました。



みんなの思いが詰まった贈り物、一人ひとり手渡ししてきました。



YES/NOクイズでは班活動を行い、みんなで協力して学習を行うことができました。



モンゴルの民族衣装「デール」をみんなで協力して着てみました。民族衣装を着た後は、モンゴルの伝統楽器「馬頭琴」を演奏してみましたが、なかなか音が出ません。

【所感】

モンゴル=草原というイメージを持っている児童が多く、首都のウランバートルの写真を見せたとき「日本とあまり変わらない風景だ。」という驚きの声も上がった。また、モンゴルの民族衣装やゲルでのくらし、モンゴルでの授業形態等の相違点だけでなく、自分の暮らしと重ね合わせながら日本とモンゴルの共通点についても考えさせたいと思い授業を展開していった。また、人権参観日で「ちがいのちがいの」を学習し保護者にも授業を参観してもらい、みんなで考える場を設けることで少しずつだが広がりを見せ始めた。

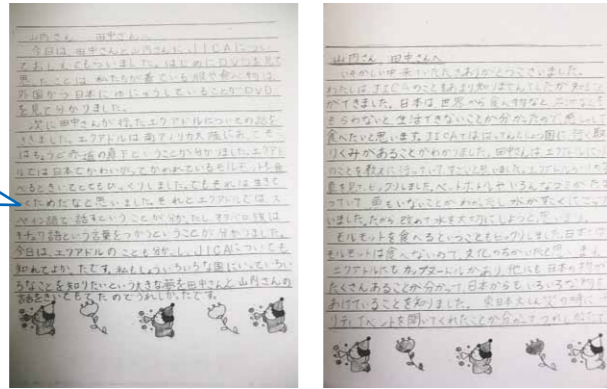
第4・5時 JICAって何だろう？

なぜ国際協力を行うのか、日本と開発途上国はどのように繋がっているのか、そしてどのような人・団体が活動しているのか。「国際協力」の基本について、JICA高知県国際協力推進員の山内さん、そして元青年海外協力隊員の田中さんに来ていただき、世界の現状やエクアドルについての話をしてもらった。

児童の反応

- 日本は他の国の食べ物など、開発途上国の助けがないと生活できないので、これから残さず感謝して食べなければと思いました。
- 東日本大震災の時(エクアドルの人たちが)チャリティーイベントを開いてくれたことを聞いてうれしかったし、そういうことをしてくれるおかげで、日本で生活できているだと思いました。
- 日本は食べ物を海外からほとんど輸入していると社会の授業で勉強して知っていたけど、山内さんの話を聞いて、外国が日本に輸出してくれなかったら日本はどうなるのだろうと思いました。
- 将来色々な国に行って色々な事を知りたいという大きな夢を田中さんと山内さんの話を聞いて持てたのでうれしかったです。

児童18名が
山内さんと田中さん
に手紙を書き
ました。



【所感】

エクアドルや開発途上国とのつながりの中で、自分たちの今の生活があることに気付いた児童が多く見られた。食べ物ひとつにも、開発途上国の大事な水が使われ、それを自分達が食べていることに気づくことで世界と繋がっていることを意識できたのではないかと考える。また、開発途上国との関係の大切さと同じように、自国が世界平和のために大きな役割を果たしていることに気付かせることも大切だと考える。次時では、世界の国々で活躍する日本人達から感じたことを元に、自分たちができる「助け合い」について考えさせたいと思い、授業を展開していった。



エクアドルってどこだろうね。



日本と開発途上国との繋がりについて話をしてもらいました。



エクアドルでの活動を紹介してもらいました。

第6・7・8時 自分たちができる「助け合い」について考える。(総合)

【ねらい】

今まで関わった人たち(青年海外協力隊、JICA職員、西村さん、田中さん等)から聞いた話や感じたことを基に、自分たちにもできる「助け合い」について考え発表する。

【展開】

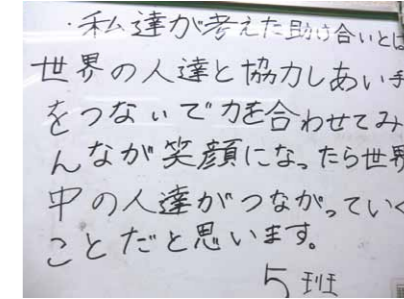
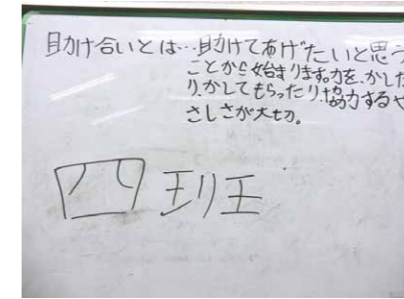
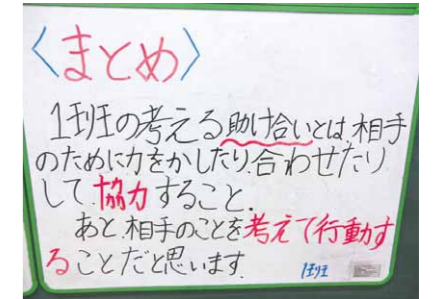
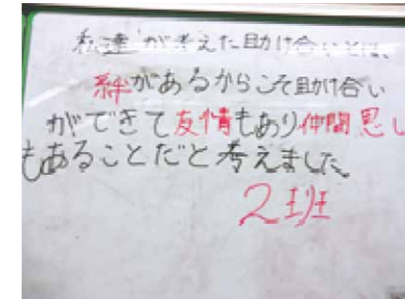
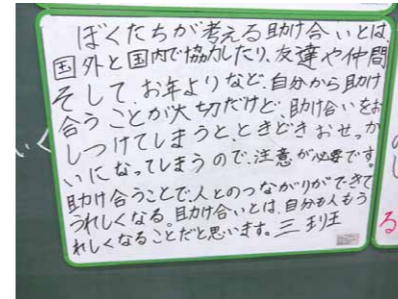
	時間	学習活動	資料・準備物
導入	5分	○今まで出会ってきた人たちの写真や手紙をみて振り返る 様々な人たちが、「自分のためだけでなくみんなのためにも」という思いのもと、行動していることを児童の感想をもとに確認する。	・写真 ・メール ・T-シャツ
展開	30分	(1)「助け合い」について考える ・「助け合い」について「派生図」で考える。 ・それぞれの「助け合い」について意見を発表する。 (2)自分たちができることについて考える ・自分たちができる、持続可能な活動について考えを発表する。 (3)これからどうしていきたいか考える。 (集会での発表・ポスター等でみんなへの呼びかけ)	・ワークシート ・派生図

まとめ	10分	○本時の感想を書かせる。 ワークシートに本時の感想を書かせる。	・振り返りシート
-----	-----	------------------------------------	----------

児童の反応

- モンゴルで青年海外協力隊をしている皆さんは、お金のために働いているのではなく自分ができる事を考えてモンゴルに行ったということを知りました。自分のことだけでなく、他の人のためにできること、相手の立場に立って考えているのすごいと思いました。
- 他の人のためにできること等、すごい思いがあってモンゴルに行ったのだなと思いました。清水さんも最初は興味があったと書いてあったので、なんでも興味を持つことが大切だと思いました。
- 日本の人が他の国へ行って、他の国の人のために何かをしったり協力したりして、助け合いが広がっていくのだなと思いました。

※派生図を使い「助け合い」とは何かを考えました。みんなの考えを共有し、今自分たちができる「助け合い」を考え、学習発表会でみんなに広げることになりました。



【所感】

前時の授業感想の中で、「つながり」「助け合い」という言葉がでてきていた。最初の計画では、自分ができる「国際協力」について考える時間を設定していた。しかし、授業をしていく中で、まずは自分の身近な人・事柄からのほうが児童にとって目的が明確になるのではないかと考え、今回の「自分が今できる助け合い」に辿りついた。「身の周りの人に感謝する」「人との繋がりを大切にする」「学級で助け合う」「色々な人を応援する」。このようなことが、国際協力の第一歩と考える。教師の考えを押し付けるのではなく、子どもと一緒にこれからも「自分の事だけでなく、他の人の事も考えられる」繋がりを大切にしていきたい。

授業実践を終えて(成果と課題)

今回の研修の中で、私が一番感じたのは『人との繋がり』だった。今こうして、子ども達にモンゴルのことを教え、伝える中にも、たくさんの人たちとの繋がりがあったからこそできているものと考えます。

モンゴルの研修から帰ってきてから「つながり」をキーワードにして、授業を展開したい思いがあったが、どのように自分が感じたこと、経験したことをつなげていけばよいか悩みながらの授業でもあった。色々考える中で、今まで気づかなかったことや考えきれなかったことがたくさんあることに気付いた。また、今回のサブテーマでもあり、学級目標でもある「気づき・考え・行動」に沿うことが今の自分にできる事ではないのだろうかと考え、今回の授業を行っていった。授業の中で特に気を付けたのは、自分の思いや考えを押し付ける授業展開にしないことと、子ども達に伝え考えさせる時には、確かな根拠をもって授業に臨むことだった。初めての国際理解教育で決めつけや間違っただけの情報を子どもに伝えることは、絶対に避けたいと思ったからだ。

自分にとっても、子ども達にとっても今回が国際理解教育の第一歩と考える。まだまだ、やり残したことはたくさんあるが、一番大切なのは今回学んだことを、一人でも多くの人たちと一緒に、自分たちができる事を考え継続して行っていくことだと思う。そして、今回の研修で出会った多くの人達との出会いを大切に、これからも自分ができる国際理解教育を続けていきたい。

資料

【スライド教材抜粋】



参考資料

【書籍】 ・「世界がもし100人の村だったら」マガジンハウス、池田香代子 ・「ちがいのちがい」
 ・「どうなっている世界と日本」 独立行政法人 国際協力機構

【映像資料】 パワーポイント

【インターネット】 ・グーグル・アース ・モンゴル - wikipedia ja.wikipedia.org/wiki